道路を起点に地域の未来をつくる
～道の駅とくのしまに見る離島型道路行政と地域拠点形成～

鹿児島県　徳之島町　企画課

（徳之島町のご紹介）

鹿児島県徳之島町は、鹿児島市の南南西 468km、空路で約 60 分、海路で約 14 時間の距離に位置し、種子島付近から与那国島まで 1,300km にわたって弓なりに連なった琉球弧と呼ばれる地域にあります。

徳之島全島の総面積は 247.8km^2、日本で 11 番目に大きな島で、徳之島町は半分弱の 104.92km^2 を占め、東側に水深 6,000m もある琉球海溝、西側に沖縄トラフと呼ばれる深い海に囲まれています。

トクノシマエビネ

また、西は井之川岳（標高 645m）や天城岳などの山岳で天城町と境界を成し、南は本川の河川で伊仙町と隣接しています。

令和 3 年 7 月 26 日には、奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島が生息する野生動植物の固有種の多さと生態系の多様性を評価され、世界自然遺産登録されました。徳之島の特徴的な動物には、徳之島の固有種である「トクノシマトゲネズミ」、「オビトガゲモドキ」、奄美大島・徳之島の固有種である「アマミノクロウサギ」、「オリイジネズミ」、また植物においても徳之島の固有種である「トクノシマエビネ」、「トクノシマカンアオイ」、など数多くの希少動植物が存在し、徳之島の豊かな自然を育んでいます。

アマミノクロウサギ

徳之島の娯楽の一つとして「闘牛」が盛んに行われています。闘牛の歴史については、その起源や歴史に関して不明な点が多いのですが、農耕用として飼育されていた牛同士が突然、戦い始めたのをきっかけに農家の人々の娯楽として広まったと伝えられています。現在の闘牛は、戦歴によって番付が決められ、年に 3 回のタイトルをかけた大会等が開催されています。

闘牛

はじめに

道路は単なる移動手段ではなく、地域の産業、暮らし、文化、そして命を支える基盤です。とりわけ離島地域においては、道路は人や物の流れを左右する「生命線」であり、その活用の在り方は地域の持続可能性に直結しています。

鹿児島県徳之島町では、こうした認識のもと、道の駅とくのしまを道路行政と地域づくりを融合させる拠点として位置づけ、その機能高度化と利活用の拡充に取り組んでいます。

1．道の駅とくのしまの立地と基本機能

道の駅とくのしまは、島内主要道路沿いに位置し、観光客・物流関係者・地域住民など多様な道路利用者が立ち寄る結節点として整備されました。

道路利用者への休憩機能、トイレ、駐車場といった基本的なサービスに加え、観光案内所、物産販売、飲食機能を備え、島内外の交流を促進する拠点として機能している点が特徴です。

【写真 1】道の駅とくのしま外観（主要道路に面し、島の玄関口として来訪者を迎える）

2．「通過点」から「目的地」へ ― 機能高度化の考え方

従来の道の駅は、道路利用者の休憩施設としての役割が中心でした。しかし徳之島町では、道の駅を「通過点」ではなく「訪れる目的地」として再定義し、滞在型・交流型施設への転換を図っています。

そのために重視しているのが、

- 地域産業との連動
- 体験・情報発信機能の充実
- 道路行政と観光政策の一体化

です。道路を利用して訪れた人が、道の駅で島の魅力を知り、島内各地へと回遊していく流れをつくることで、道路インフラが地域経済の起点となる構造を目指しています。

3．地域産業を支える道の駅の役割

道の駅とくのしまでは、島内で生産された農畜産物や加工品を積極的に取り扱っています。島野菜や果樹、魚介類、畜産物、黒糖加工製品など、徳之島ならではの資源を前面に打ち出し、生産者の顔が見える売り場づくりを行っています。

単なる物販に留まらず、生産背景や文化を伝えるパネル展示やイベントを実施することで、商品価値の向上とブランド化を図っている点が特徴です。

【写真 2】道の駅パンフレット

4．観光動線の起点としての情報発信機能

離島観光においては、情報の集約と発信が極めて重要です。道の駅とくのしまでは、観光案内機能を強化し、島内各地の観光資源やイベント情報を一元的に提供しています。

来訪者は、まず道の駅で情報を得て、そこから島内へと分散していきます。この動線設計により、特定エリアへの集中を避け、島全体への経済波及効果を生み出しています。

5．道路行政と観光振興の連携

本取り組みの特徴は、道路行政と観光政策を切り離さず、一体的に進めている点にあります。道路整備によるアクセス性向上と、道の駅を拠点とした情報発信・滞在促進を組み合わせることで、道路の整備効果を最大化しています。これは、道路を「整備して終わり」ではなく、「使われ、地域価値を生み続けるインフラ」として捉える行政姿勢を表すものです。

6．防災・減災拠点としての道の駅

徳之島は台風や豪雨といった自然災害のリスクを抱えています。道の駅とくのしまは、平常時の交流拠点であると同時に、災害時には防災拠点として機能することを想定しています。物資集積、情報発信、避難支援など、道路ネットワークと連動した役割を担うことで、離島における防災力向上に寄与しています。

7．官民連携による運営体制

道の駅とくのしまの運営においては、官民連携の視点も重要です。行政が基盤整備と方向性を示しつつ、民間のノウハウや地域人材を活用することで、柔軟で持続可能な運営を目指しています。この体制は、財政負担の軽減だけでなく、地域に根ざした施設運営を可能にし、道路行政施設の新たなモデルを目指しています。

8．離島型道路行政モデルとしての意義

道の駅とくのしまの取り組みは、離島という制約条件の中で、道路行政が果たし得る役割を再定義するものです。道路を「地域経営の装置」として捉え、産業、観光、防災、交流をつなぐことで、持続可能な地域づくりを支えています。

おわりに

道の駅とくのしまは、道路行政を起点に、人の流れ、産業の流れ、情報の流れを生み出す拠点として進化を続けています。今後も、地域と共に成長する道路拠点として、離島地域における道路行政の一つのモデルを示していくことを目指しています。